

9.2 情報倫理学の確立をめざして

柴崎文一

bash@cccre.soken.ac.jp

教育研究交流センター/山形大学

倫理学研究には、価値や規範に関する純粋に理論的な探求を課題とする分野と、現実社会が直面している諸問題に対し、有効な「解」を提示することを目的とする分野の二つがあり、とくに後者を「応用倫理学」の分野と呼ぶ。

応用倫理学の分野には、現在、「生命倫理学」、「環境倫理学」、「情報倫理学」の三領域が存在している。しかしながら「情報倫理学」に関しては、他の二領域に比し、いまだ見るべき成果を提示するまでには到っていないというのが現状である。¹

しかし、社会の情報化はこの数年来、急速に進展し、日々「情報化」に起因した問題が発生し続けているということは周知のとおりである。このような状況下で、「情報倫理学」の確立は、現代に生きる哲学・倫理学研究者にとっての急務の課題であることは言うまでもない。そこで本小論では、情報倫理学の課題とするべき点を明確化することによって、以後の探求が向かうべき方向性を示してみることにしたい。

・情報化社会とインターネット

今日の情報化社会を、ここまで高度、かつ日常的なものにせしめた要因として、我々は、PCをはじめとするハード面での飛躍的な処理能力の向上と価格の低下に加え、インターネットという情報通信システムの普及と発展がはたした役割を見逃すわけにはいかない。

そもそもインターネットは、大学などの高等研究機関が、個々に所有する貴重な知的資源を共有、かつ交換するための方法として発達したものである。したがって、ごく最近になるまで、インターネットを利用できるのは、特殊な環境に属する人々だけであった。しかし現在は、一般家庭のPCからさえ、インターネットに接続することができるまでになっている。

インターネットがここまでの普及をみせたことには、さまざまな要因が考えられるが、とりわけ重要な点として指摘されるべきは、インターネット自体の設計思想であろう。

インターネットは「センター」をもたない、いわゆる「分散型」のネットワークシステムである。ネットワークの統一性は、プロトコルと呼ばれる通信規約によって与えられている。プロトコルには、TCP/IPを初めとして、通信環境やサービス内容に応じ、さまざまな種類が存在する。しかし、これらのプロトコルが定めるものは、基本的に、コンピュータネットワークによる通信環境が実現するために必要な形式的条件のみであって、少なくとも現状では、ネットワークへの参加資格や情報内容を規制するような規定は存在しない。こうしたインターネットの「オープン」な性格が、今日のような普及を可能ならしめた主要因であると言ってもよいだろう。

もちろんインターネットの普及には、ハード面での発達がはたした役割も見逃しえない。インターネットでは、基本的に、接続されるコンピュータは、それぞれが自己自身において情報通信に必要な機能を実装していることが前提とされている。しかしこのことは、個々のコンピュータが、インターネットで要求されるプロトコルを実装する能力さえあれば、直接インターネットに参加することができるということを意味している。数年前までのPCの能力から見れば、個々のPCがそれ自体でインターネット上の各種プロトコルを実装するということは非現実的であったかもしれない。だからこそ、一般PCユーザの世界では、「センター」に高機能なホストコンピュータを置いた、いわゆるパソコン通信が普及したのである。しかし、この数年間のPCにおける処理能力の向上と価格の低下には、驚異的なものがある。かつては大規模なホストコンピュータでなければ実

¹現在、日本ではFINE (Foundations of Information Ethics) <http://www.fine.bun.kyoto-u.ac.jp/>というプロジェクトが活動を行っており、その成果が大いに期待される場所である。

現できなかったようなサービスが、今日では、極めて安価なPCによっても実行できるようになっている。したがって現在のPCは、インターネットに接続するためのゲートウェイさえ確保できれば、世界中に広がるインターネット上の情報資源を利用でき、また世界に対して情報を発信／公開することもできるのである。そして現実には、「プロバイダ」と呼ばれるインターネット・ゲートウェイの提供者が増加したことにともない、今日のようなインターネットの普及が見られることになったのである。

・インターネットの特質

インターネットは本質的に「オープン」な性格をもったネットワークであると言った。極言するならば、インターネットの基盤プロトコルで定められていることは、複数のコンピュータが相互に情報通信を行うための基本方式のみであると言ってもよい。したがって、この基本方式さえ順守するならば、インターネットでは、如何なる情報を如何なる方法で公開／発信しても何の支障もなく、またそれが可能でもあるようになっている。言い換えるなら、インターネットの世界では、基本的に、誰もが新しいアイデアやサービスを提案することができ、またこの点は、インターネット上の基本サービスについても例外ではないのである。それどころかインターネットは、常にオープンなかたちで提案された新しいアイデアの積み重ねによって発展してきたと言っても過言ではない。インターネットのこうした特性が、現在、さまざまな社会的問題を発生させる原因にもなっているが、この点こそがインターネットの発展と可能性を支える重要な基盤にもなっているのである。

もちろん、全く無秩序のうちに、提案された新しいアイデアや試みが、いつの間にかスタンダードなものになるということではない。提案された新しいアイデアやサービスは、IETF (Internet Engineering Task Force) / IESG (Internet Engineering Steering Group)による検証・審査を経て、RFC (Request For Comments)というかたちで標準化されることになる。したがってRFCには、インターネットに関する全ての情報が網羅されていることになる。そしてこのRFCもまた、その全てがインターネット上で公開されるのである。²

インターネットの発展を見る上で、この「全ての情報が公開され、誰もがその発展に参加できる」という点は、極めて重要である。全ての情報が公開されているということは、問題点の発見・改善に、世界中の知識を結集することができるということを意味している。そして誰もが、自分の発見や新提案を、世界に向けて発信することができるのである。そこには人種・学歴・身分といった一切の差別が存在しない。また匿名であろうと、実名であろうと自由である。

ただし、こうした活動に参加することから直接的な利益を得ることは、ほとんど期待できない。しばしば言われるところではあるが、こうした形式での活動が機能するなどということは、いわゆる「経済の常識」からすると、とても考えられないことであった。しかし、現実にはインターネットの世界は、こうして発展してきたのであり、また現在も同様の仕方で発展し続けているのである。インターネットの世界には、本業などそっちのけで、本人には1円の利益にもつながらない新しい技術の開発に没頭する「ハッカー」が無数に存在するのである。

最近では、このような仕方で発展してきたものの典型として、LinuxというOSの存在が特に有名である。しかし、「オープンなかたちでの開発」というポリシーは、Linuxにのみ特徴的なものではない。そもそもインターネット自体が、こうした仕方で発達してきたものであるという点を理解していない論評が多いように思われる。Linuxのような「オープンソース」のスタイルは、インターネットの世界では言わば「常識」だったと言ってもよいだろう。

・オープンであることに起因する問題

インターネットがオープンなシステムであることに基づくメリットには、以上のほかにも数多くの点が上げられるだろう。しかし、システムがオープンであることには、メリットばかりでは

²<http://www.rfc-editor.org/rfc.html>

なく、当然のこととして、多くの問題点も認められる。中でも重大な問題として検討されるべき点は、インターネットの言わば「自律的自己発展性」とでもいうべき特性から派生するであろうと考えられる問題である。

上述のとおり、インターネットの開発には、基本的に、世界中の誰もが参与することができる。こうしたスタイルに基づく開発の速度には驚異的なものがある。これにともないインターネットの情報処理能力は、加速度的な勢いで向上している。

現状では、WWW (World Wide Web) や電子メールの利用が、インターネットの一般的な利用形態であろうが、電子商取引や金融取引での利用拡大傾向にも見られるように、インターネットは、近い将来、我々の生活のあらゆる面と、より深く密接な係わりをもつようになるだろう。そして、そのような世界の実現は、我々人類に、それまで経験したことのなかったような高い利便性をもたらすに違いない。

しかしそれと同時に、インターネットという、ある意味では一つのネットワークシステムの中に、我々の生活のあらゆる面が取り込まれるとき、それまでの世界では考えられなかったような仕方で、個々の出来事や情報が関連し合うことになる。これによって、これまでには想像もできなかったような問題が多数発生することにもなるだろう。もちろん現状でもインターネットに関連した問題は枚挙にいとまがないほどである。にもかかわらず、その利便性の高さから、社会の一般的な傾向は、インターネットの利用拡大へと急速に傾いている。この傾向は、もう誰にも止めることはできないだろう。³

しかし、こうした傾向をみせる社会の中で、インターネットが、基本的に、「自律的自己発展性」とも言うべき特性を具えたシステムであるということに気づいている人が、どれほどいるだろうか。

上述のように、インターネットの開発には、世界中のコンピュータ・ハッカーが従事している。そして、私の印象が間違っていなければ、これら開発者達の目的は、インターネット技術それ自体の向上にあり、例えば「人類の幸福」などといった、狭義でのインターネット技術の外にある目的とは直接係わりをもっていないように思われる。しかも開発成果は、インターネットによって即時に公開され、さらに高次の開発が続けられて行くというスタイルをとっている。これはもう、インターネットという情報通信システムが、自己のシステムを利用しつつ、自己目的的に発展し続け、その開発に携わる人間の姿は、このシステムの発展に奉仕しているかのようでさえある。しかも多くのハッカー達は、この「奉仕」に恍惚としているのである。それはあたかも、「神の国」の実現に一身を捧げる修道士のようでもある。彼等の活動を止めることは、もう誰にもできない。こうしてインターネットは無限に発展し続けるのである。

インターネットを中心とする情報通信ネットワークが、我々の生活世界全体を覆う日は、間もなくやって来るだろう。あらゆる情報が、巨大な一つのネットワークシステムの中に取り込まれて行くのである。しかも、このシステムの制御権は、極言するならば、我々人間の側にあるのではなく、すでにシステムの側に譲り渡されていると言ってもよいだろう。情報の内容や伝達経路を制御できない／しない仕組みをもったネットワークシステムが、自律的に自己を発展させつつ、我々の生活世界全体を包み込もうとしているのである。

・ 情報倫理学の課題

³我が国の政府には「高度情報通信社会推進本部」

このような状況の到来を間近にひかえ、我々は、我々自身と環境世界の全ての在り方について、言わば情報論的視点からの根本的な捉え直しの作業というものに迫られていることを自覚しなければならぬ。

我々人類は、この近・現代という時代において、経済性・利便性を価値の中心にすえるという方針の下に、自然環境を単なる資源と見なし、「利益」を得るための手段として利用して来た。その結果が今日の自然環境破壊につながったことは言うまでもない。自然環境は、しかし、生物としての人間が存在するための必要条件である。つまり我々人類は、現在、自己の生物的存在基盤を危うくする活動を、日々行い続けているのである。これはまさにM・ウェーバー (M. Weber) の指摘した「合理化の帰結としての非合理性」を如実に示す現象以外の何ものでもない。

同様に人類は、やはり経済性・利便性という観点から、社会の高度情報化という作業をますます推し進めるであろう。それも、インターネットという「自律的自己発展性」を具えた巨大で単一のシステムを基盤とするデジタル情報化の推進をである。この結果として出現する社会は、おそらく極度に技術目的論的で無制御的な様相を呈することであろう。言い換えるなら、我々は今、技術の発展に理性が隷属し、人間の主体性が無意味化する世紀の到来を迎えようとしているのである。

この問題に対する一つの決定的な「解」は、「これ以上のデジタル情報化・ネットワーク化を推進しない」というものであろう。しかしこれほど無意味な解もない。現実の世界が事実として、高度なデジタル情報化・ネットワーク化へと盲進している以上、この事実に応じた解が求められなければならない。来るべき高度情報化社会で我々が直面せざるをえない問題の本質を的確に捉え、理性のもてる全ての権能を賭して、人間と社会のあるべき姿が探求されなければならない。そしてこの課題を担うものこそ「情報倫理学」に他ならないのである。